

第2回安全・安心と暮らし専門分科会議事概要

1. 日時

平成19年3月20日（火）13:00～15:30

2. 場所

金沢勤労者プラザ

3. 出席委員（敬称略）

高山座長、石田委員、奥寺委員、上村委員、川上委員、酒井委員、松森委員（計7名）

4. 議事（概要）

（1）開会

（2）資料説明

事務局から検討資料、参考資料について説明

（3）意見交換

（4）座長とりまとめ

（5）閉会

今回は、5月か6月に開催予定

5. 主な発言内容

- ・ 明るいイメージのない能登半島をどうしようかという重点的なプロジェクト、アイデアが必要である。
- ・ 日本海を挟んで対岸諸国に近いため、ミサイルの脅威や環境リスクを受けやすく、急峻な山や急流河川を有し、能登半島などの過疎地もあり、そのような短所を補う必要があるが、それを逆に長所と見ると、危機をいち早く察知して情報発信したり、豊かな自然の提供、食糧供給基地、エネルギー供給・備蓄基地など日本の生活を支える基盤となる地域として貢献できるとともに、日本の安全・安心を支える使命を有するのではないか。
- ・ 「人や物の流れ」を考える必要がある。食料やエネルギーは大都市の消費を支えるために流れ、若者は大都市の教育・文化・雇用などに流れる。現在、地方へは大都市で使い古したもののしか流れていないのではないか。これまでの価値観を破壊して発想を転換するしかない。
- ・ 災害時の円滑な支援のためにも港湾と高速道路をつなげる必要がある。また、外国では空港と鉄道のアクセスは当たり前であるが、日本の地方空港では全く対応できていない。
- ・ 治山と治水を同列に考えているが、治山には100年必要である。山が豊かになって初めて水が生かせる。今は山で生計を立てられないため山を守れなくなっている。中山間地の活性化のためには、山で生計が立てられるような仕組みが必要である。
- ・ 山の所有者の8～9割は県外の人であり、これらの人に見切りをつけられたらどうなってしまうのか。山を守ることに民間任せにしておいていいか疑問である。

- ・「安全・安心を支える圏域の形成」のところでは、他の圏域の安全を支えるための「外部に向かってナレッジを発信する」という視点が入っていない。
- ・身近に原子力発電所や火力発電所があり、どうしたら安全・安心を得られるか考える必要がある。エラーには人間的なエラーと機械的なエラーがあるが、北陸はそのエラーに対応した二重三重の安全システムを考える立場にあり、そのことにより日本をリードしていけるのではないか。
- ・ナレッジは仏教・文学・哲学などとも関連する。北陸は雪国であり冬場閉じこもった内向的で苦渋に満ちた不便な生活をしてきたが、それが逆に思想家などの偉人を輩出しているのではないか。北陸出身の偉人を調べてみてはどうか。
- ・北陸はもともと開発されていた地域であり東海道より古い歴史があることから、伝統・知恵・文化などをしっかり盛り込む必要がある
- ・流木対策だけではなく、生活全般にわたって河川の水系・流域は非常に重要である。
- ・中山間地では祭りの維持も困難な状況であり、誰が担い手になるか明確にしないと対策は進まない。
- ・山林の立ち枯れなど環境破壊が深刻。松食い虫など生物学的なもの、黄砂・酸性雨など化学的なものに原因を分けて現状を発信すべき。
- ・地域防災システムは具体的なものが必要である。雪国は地域のコミュニティの共助で成り立っていたが、現在、中山間地では共助ができなくなっており、そのためにも地域防災システムが必要となっている。中山間地で暮らす人々がどうオペレーションするのか、共助をどう立て直すのか、共助のみではカバーできない部分はどうするのか。
- ・北陸には隔絶された中山間地域はないが、放っておけば崩壊する。対策の一つとして、流域単位の取り組みを意識的に行う必要がある。コミュニティバスの経路にしても地域独特のこだわりがある。
- ・「明るい」とか「暗い」とかの概念で表現することやめた方がよい。「明るい農村」と言ったとたんに暗さが表面に出てしまう。特性や良さを出すようにした方がよい。
- ・何が独自で何が優れているか、地域の人や子どもに認識してもらい、何を保全すべきかが貴重かということ共有することが重要。そのためにも学習が必要であり、各地で食育を通して地産地消やまちづくりに取り組んでいる。県境を越えて地域の資源を活かした地域づくりが盛んになってきた。テーマ毎に互いに発見し合う多重的なネットワーク化や仕組みづくりが必要ではないか。
- ・観光とは人を見に行くこと、人に会いに行くことと考えると、例えば、特色ある自然景観となっている棚田は人が作ったものであり、そこに生きている人間がベースということが理解できる。田舎と都会とは、誇りを取り戻す戦い。価値観の考え方であり、「楽しみ」とは「楽しむ心」がなくてはならない。
- ・北陸の魅力100選など「北陸空間」の魅力の対外発信を仕掛けるプロジェクトチームがあってもよい。
- ・知識や能力を与えることが「人づくり」ではない。個ではなく個の総和である集団を育てる必要があり、集団としての多様な価値を持つ人の集まる場・活動の場を育成することが必要である。
- ・「人づくり」は、ハローワークやトレーニングではなく、団塊世代が就農しようとしても年

年齢制限があるといった垣根を除いたり、「多世代・多地域の交流の場」を設けることであり、真のネットワークの力が発揮されなければいけない。

- ・ 広域的連携システムは、入口から出口まで体系的なものでなければならぬし、NPOのみならず市民全員の参加を得て動かしていくべきもの。
- ・ 人口減少高齢化社会の先進地である北陸は、福祉や防災など中山間地対策のモデル地域にならざるを得ない。
- ・ 「地域づくりのモデル圏域を形成」を考える場合、都市再生モデルなどのモデルを作らないといけないのではないか。アメリカ西部開拓時代の町はセンターに様々な機能を置いて、そこへ開拓者が集うシステムを取っていた。中心市街地の空洞化や中山間地の地域コミュニティ崩壊などの課題について、どこかをモデル的にやってみて北陸型プラン・北陸型ビレッジとして提案してはどうか。
- ・ 中山間地の公共交通が破綻しており、社会実験などを通して利便性の確保やコスト削減にも取り組んで欲しい。

(速報のため、事後修正の可能性があります。)